

## 第1回宗像市幼児教育審議会議事録（要点筆記）

日 時	令和7年10月27日(月) 16時00分～17時00分				会 場		市役所 202会議室	
委 員	船越 美穂	<input type="radio"/>	中山 健	欠	木部 里美	<input type="radio"/>	北岡 かや子	<input type="radio"/>
	鐘井 秀子	<input type="radio"/>	高橋 茂	<input type="radio"/>	中尾 麻貴子	<input type="radio"/>	奥村 美香	<input type="radio"/>
	木村 友美	<input type="radio"/>	後藤 未奈子	<input type="radio"/>	大和 寿美	<input type="radio"/>		
事務局	(子ども子育て部) 早川部長、(子ども支援課) 姫野係長、(子ども家庭センター) 加地係長、大森係長、(子ども育成課) 許斐課長、吉田係長、萩野係長、三吉							

### 1 あいさつ

子ども子育て部長より開会のあいさつ

### 2 報告

事務局より「令和6年度の幼児教育事業報告」及び「令和7年度の幼児教育事業計画」について報告

- ・令和7年度の保幼小義連絡会は、事前に聞きたい内容を具体的に聞き取りをし、園や学校に伝えていたため、当日有意義な意見交換ができた。
- また、今年も市保育協会よりカフェコーナーの設置の提供があり、リラックスした雰囲気の中で実施することができ大変好評だった。
- ・保育の日については、令和7年度は、4月と8月の保育の日を3日間に絞って実施することにより、昨年より訪問者が増加した。4月は12園に20名、8月は18園に25名の園と小学校の先生が訪問し、実際に子どもの姿や先生方の関わり方などを見学することができた。

### 3 協議

保幼小連携・接続の課題について

(事務局より)

- ・園に喜んで登園していた子が、小学校に入学して行き渋るようになったという声がいくつかあった。
- ・不登校の現状を踏まえ、どんな課題があるか、何が必要であるか協議を行いたい。
- ・令和6年度の宗像市内の小学校1年生の不登校児童数（兆候を含む）は、3名だったが、令和7年度は10名になり増加した。
- ・不登校児童数は、全国比に比べると低いが、宗像市全体の不登校人数は増加している。
- ・安心して園生活から小学校生活を送るにはどうすればよいか。

(委員より)

- ・朝、登校時に行き渋っている子がいる。
- ・学校は、子どもの居場所であってほしい。
- ・低学年だけでなく、中学年、高学年にも不登校の子はいる。
- ・福祉的な援助が必要なお子さんがいる。
- ・朝の挨拶だけして帰る子もいる。
- ・2学期からテストに点数がつくようになり、ネガティブな言葉を発言するようになった。
- ・ホープは学校と連携があるため、学校復帰がしやすい。
- ・不登校者の中には、フリースクールに喜んで通っている子もいる。
- ・情報収集して、最善の子どもの利益になるよう行動されている保護者もいる。
- ・1学期に楽しく通っていた子も、夏休み明けに行き渋り、送迎する保護者が増えた。
- ・2学期になり、授業のペースが速くなり、ついていけない。
- ・保護者の不安な気持ちが、子どもに伝わることもある。
- ・保護者と先生が少しの時間でも話ができる、コミュニケーションがとれると安心する。
- ・小学校のリズムに合わせることが難しい子には、別の面での配慮が必要。
- ・先生やカウンセラーなど、たくさんの人と関わりながら、学校は嫌な場所だという気持ちが緩和されて、自分がいられる居場所になるとよい。
- ・学校に行きたいと思えるような工夫が必要。学校に行くのは楽しいと思える場面ができるとよい。
- ・園では送迎の際に保護者と先生が話をする機会があり、コミュニケーションも取りやすく安心。
- ・何か気になることがあると送迎の際に保護者と話すことができ、その場で解決できる良さが園にはある。困り感の原因が分かりやすく手立ても考えやすい。
- ・昨年度から幼稚園にホープの子が来てくれている。(プール掃除や片付けなど)
- ・自分が動くことで何か人の役に立っているという経験がホープの子の成長につながっている。
- ・園とホープとのつながりを大事に、取り組みを行っている。
- ・小学校側が工夫できることは、子どもが主体的になっているか、学びが上手くいかないときに支援する人がいるかどうか、どうすればやる気がおきるのかなど考えることはできる。
- ・学習指導要領も見直しが行われるので、柔軟な時間の活用の仕方ができるとよい。
- ・子どもが学校生活に、やりがい、生きがい、楽しさなどを実感できるようになるとよい。
- ・教員が保育に参加し体験することで、学校現場の課題解決につながっていけばよい。
- ・保護者が学校を信頼することで、子どもに好影響を与える。そのためには、保幼小がしっかりと連携していくことが大切だと思う。
- ・ニュースでも不安な出来事が流れてくるので、保護者にとっても子どもにとっても安心基地ができることが一番だと思う。
- ・学びの形も育ちの過程も様々で、子どもの可能性を信じて、その子がその子らしくいられる安心できる場所や安心できる人を見つけられるとよい。
- ・その子が自己の中で安心基地を育てることができ、自分から外に出ていけるときを焦らず待つことも必要だと思う。

- ・行き渋りの理由が分からない子もいる。一見、コミュニケーションをとれているように見える子でも人への過敏さがある。自信のなさや苦手さを感じる子もいる。
- ・家族以外の人と共有する場所がない人に寄り添った家庭全体の支援が必要。どこにもつながっていないという子がゼロになるようにしたい。自宅に訪問する”訪問事業”もある。
- ・不登校の兆候が出始めたら、学校と相談しながらどこで学ぶかを選ぶことができる。
- ・リーフレット「ぎゅっと」に、1日1度はハグしよう！と載っているが、支援員研修会に参加した先生から、子どもに触るときは、「触っていい？」と声をかけて触りましょうと言われたと聞いた。小学校で熱を測るときに触っていいか確認することは大事のこと。
- ・3歳児でも、ぎゅっとされることを嫌がる子がいる。
- ・文科省から推奨されている包括的性教育からも、子どもの気持ちを尊重することや大人の関わり方を考えていくことは大事だと感じた。
- ・就学相談が受けれなかった保護者から子育て支援センターに相談があり、入学後の様子を心配されていた。相談できる場があることを伝え、安心につながるよう配慮した。
- ・就学相談を受けた保護者の中には、通級・特別支援学級の選択や放課後デイサービスの申込など、入学前から決めることに不安を抱えている保護者もいる。
- ・母の不安が子どもに伝わらないとよいと思っている。
- ・保護者の居場所も学校内につくれるとよい。
- ・学校側としては、不登校や行き渋りの子どもたちの居場所の選択がいくつかあるが、やはり学校で楽しく笑顔で過ごしてほしい。学校が子どもたちの居場所になってほしいと願っている。
- ・そのためには、学校現場も園に訪問したり、職員研修に参加したりして学ぶことは大切である。
- ・本日のキーワードは、保護者の不安をどう軽減していくかではないか。
- ・保護者が担任に信頼を感じて安心していたら、子どもに伝染していくのではないか。
- ・「楽しい小学校生活に向けて」のリーフレットに載っている保護者の役割を見て、親が不安にならないだろうか。
- ・次のリーフレットを見直すときは、親も小学校のイメージができ、園から小学校の親になる上で何を家庭で大切にするとよいかなどわかると、保護者の不安も和らぐのではないか。
- ・内容をもっとシンプルに、わかりやすく示されるとよい。
- ・保護者が困ったとき、相談場所の情報収集の援助も必要である。
- ・保幼小の関係者と話し合う個別のケース会議も大事だと感じた。
- ・年に一度開催されている情報交換(6月)がもう1回必要ではないか。
- ・人ととのつながりを大事に、幼児教育を理解できる小学校教諭が増えるとよい。

#### 4 あいさつ

子ども育成課長より閉会のあいさつ